

## 他在の可能性

——エリアス・カネッティにおける「変身」の思想——

宍戸節太郎

1976年、ミュンヘン大学からの名誉博士号授与に際して、エリアス・カネッティは「詩人の使命 (Der Beruf des Dichters)」と題する講演を行なった。戦後オーストリアを代表する劇作家ベルンハルトを憤慨させ、「カネッティは唯一自身のみ詩人であると僭称し、「痛々しく老いさらばえ」、「恥知らずにも愚かな文を連ねる年寄りの傲慢ぶりたるや、気の毒になる」<sup>1)</sup>と言わしめた、いわく付きの講演である。毒舌で知られるベルンハルトであるが、カネッティの講演の何が気に入らなかったものか、失望の大きさが窺われる。

「詩人の使命」においてカネッティは、詩人が「変身の番人 (Hüter der Verwandlung)」<sup>2)</sup> (VIII, 276) であること、二重の意味で番人であることが、第一の、また最も重要なことであると述べている。カネッティによれば、詩人は一方において、変身に富んだ人類の文学的遺産を習得し、他方ますます変身が禁じられていく現代社会にあって、それに抗い、古来人間が有してきた変身の才能を、自覚的に行使する使命があるという。

効率と専門化に照準が合わされ、人々が頂点ばかり見つめ、それに向かって一心不乱に努力が続けられる世界。最先端の冷たい孤独に向かって全力が注がれ、足しにならない副次的なもの、多様なもの、本来的なものが軽蔑され、消し去られていく世界。すべてが生産の目的に資するべくますます変身が禁じられ、無思慮に自己破壊の手段を多様化させ、自己破壊を防ぐべくかつて人間が獲得した性質の残余をも同時に窒息させようとする世界。およそ考えられ得る、最も盲目的な世界とでも呼びたくなる、そんな世界にあってそれに抗い、変身の才能を引き続き行使する者がいるということに、非常に重い意味があると思います。(VIII, 278)

カネッティに従えば、かつて人間は変身によって人間自身となった。人間はそれにより世界を我がものとし、それによって世界に関与してきた。なるほど独裁者の権力の起源も、もともとは変身に由来するものの、人間はもっと肯定すべきものを、たとえば隣人の情をもそれに負っている。カネッティは聴衆に語りかける。

- 1) Thomas Bernhard: Leserbrief zu Elias Canettis Rede „Der Beruf des Dichters“. In: Die Zeit vom 27. 2. 1976.
- 2) カネッティの著作の引用、参照は原則的に次によるものとし、直後に巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で示す。Elias Canetti: Taschenbuchkassette in 14 Bänden. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag) 1995.

詩人はあらゆる者に、最も平凡な者、最も素朴な者、最も無力な者にもなることのできる存在でありたい。他者の経験に対する内面からの欲求は、我々の通常の、いわば公の生活を成り立たせているような、いかなる目的によっても規定されてはならないだろうし、それは成功や価値といったものへの意図から完全に自由でなければならず、情熱そのもの、まさに変身の情熱でなければならぬと思うのです。(VIII, 279)

カネッティはこの「変身」という言葉で、何を、どう言い当てようとしているのだろうか。本稿では、「詩人の使命」におけるカネッティの目論みを明らかにすべく、はじめにカネッティの発言の思想的前提、また、この講演の時代背景を確認し、次いで、本来カネッティ思想の中心に位置するこの変身の問題をめぐる、プラトン以来のミメーシスの問題圏とも照合しつつ、検討を試みたいと思う。

### 1. 言葉のエトス、「文学の死」に抗して

ベルンハルトの機嫌を大いに損ねた「詩人の使命」であるが、カネッティが毫礫し、傲慢にも「唯一自身のみ詩人であると僭称する」というのも、厳しい口調である。ツュムナーはベルンハルトの非難を、おそらくは「不正確なテキスト理解に基づく誤解」<sup>3)</sup>であろう、と指摘している。「詩人の使命」の狙いは後に見るように、もちろん別のところにある。だが、ベルンハルトの名誉のため最初に付言するとすれば、カネッティの言語表現に違和感や「いらだち」<sup>4)</sup>を覚える者が少なくないのも、また事実である。誤解を誘う要因はカネッティの独特の文体、表現方法にもある。

カネッティの文章は気取らない、一見平易な言葉によって書かれ、構成される一文一文も、入り組んだ複雑な構造を持つことはほとんどない。知らず知らずのうちに何気なく読んでしまうと、何を読んでいるのか、意識まで拡散されてしまう。表面上の言葉数の多さとは裏腹に、その実すべてが寡黙に、遠まわしな言い方で語られ、読者にわかりやすく図式化されたり、体系立てて説明されたりすることは、まずないと言ってよい。マグリスによれば、「すべてを語っているように思われる自伝ですら、ある欠落が、彼の生の本来の真実をのみ込む黒い穴が隠されている」<sup>5)</sup>という。

カネッティは「群衆と権力」の研究に際して、その企ての一切を新たに始めるため、過去の、あるいは同時代の思想的連関の中に、自らが置かれるのを拒否した<sup>6)</sup>。したがって、

3) Rüdiger Zymner: „Namenlos“ und „Unantastbar“. Elias Canettis poetologisches Konzept. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, 1995, H. 3. S. 570-595. S. 572.

4) Ebd. S. 571.

5) Claudio Magris: Der Schriftsteller, der sich versteckt. In: Modern Austrian Literature 16, 1983, H. 3/4. S.177-195. S. 194.

6) 拙論「戦後ドイツとカネッティ——文明化の過程の検証」(『上智大学ドイツ文学論集』第43号, 2006年, 177~196頁), とりわけ190頁以下参照。

あらゆる説明は独自の術語を用いて行われ、とはいえ自身、「私はあっさりと体系を構築する人たちが好きになれないし、自分の体系がすっかり閉じてしまうことのないよう配慮したい」(XII, 129)と述べる通り、カネッティは安易な抽象化や概念定義を避け、体系が閉じることのないよう、周到に配慮を行なう。通常の説明的論述であれば、要所を得て導き出されるはずの結論が、意図して先送り、また回避されて、滔々と記述が続けられる。

30年代に書かれた小説や戯曲は別としても、イギリス亡命後のカネッティが紡ぐ文章には、群衆と権力をめぐって長年続けられた研究作業の痕跡が、やはり見え隠れする。シッケルとのインタビューの中でカネッティは、この間「いかなる概念定義にも達しないよう」努めつつも、「この研究そのものから生じた独自の術語を意識的に守ろうとした」<sup>7)</sup>と述べている。カネッティの文体に指摘されることの多い違和感やいらだちは、思いのほかこの点とその要因として大きく関係していると思われる。ポーラーはかつて『群衆と権力』の言語を、「なるほどさしあたってごくわずかの者にしか読まれないものの、百年後にもまだ読まれ継がれることが意図された言語」<sup>8)</sup>と評している。

さて、カネッティの言語が問題になるとき、そこには決まってカール・クラウスの存在が顔をのぞかせる。1924年4月初め、カネッティはウィーン大学に入学し、亡命する38年11月末までをウィーンで過ごした。この時期のウィーンはカネッティにとって、まさにクラウスのウィーンに他ならない。カネッティは朗読会に足繁く通い、クラウスとともに言語に関して思念をめぐらせている。「カール・クラウス、抵抗の学校」と題したエッセイの中で、カネッティは意思伝達の手段としての言語の不完全さについて、たとえば次のように述べている。

私が理解したのは、人間たちが互いに話しているけれども、互いを理解し合っていないということでした。言葉は他人の言葉に当たってはね返る繰り返しに過ぎず、言語が人間たちの間のコミュニケーションの手段であるという考えほど、大きな幻想はないということでした。人はたしかに他人に話すけれども、それは相手にわからないように話しているのであって、話せば話すほどわからなくなってしまうのです。  
(VIII, 48)

当時のクラウスは、言語をめぐってウィーンのジャーナリズムとほとんど戦闘状態にあった。なかでもクラウスの憤りは、彼が常套句の泥沼と見なしたウィーンの新聞に向けられた。カネッティによれば、そこには「人々に対して、いわば当の彼ら自身の口調で有罪を宣告するカール・クラウスがいた」(VIII, 45)。やがてカネッティもまた、この手法で『虚

7) Elias Canetti: Gespräch mit Joachim Schickel. In: Ders.: Die gespaltene Zukunft. Aufsätze und Gespräche. München (Carl Hanser Verlag) 1972. S. 104-131. S. 118.

8) Karl Heinz Bohrer: Der Stoiker und unsere prähistorische Seele. Zu „Masse und Macht“. In: Herbert G. Göpfert (Hg.): Canetti lesen. Erfahrungen mit seinen Büchern. München und Wien (Carl Hanser Verlag) 1975. S. 61-66. S. 61.

栄の喜劇』を書き、ナチの焚書に対する回答、言葉の闘争を行なっている<sup>9)</sup>。

カネッティは「詩人の使命」で、他でもない変身こそが、「他者へと通じる唯一の、真の通路」(VIII, 279)であると述べている。この前提には、数十年の時間を経てなお、言語の不完全さについてのクラウスとの認識の共有がある。「詩人の使命」はその後こう続けている。「なぜなら大多数の人間は、今日もはや語ることもほとんど意のままにならず、新聞や公のメディアの常套句で自らを表現し、実際には同じでないにもかかわらず、ますます同じ言葉で話しているのです」(VIII, 279)。クラウスからカネッティへ、水脈は確実に通じている。トゥールミンとジャンクは、クラウスの言葉のエトスを、かつてこう説明した。「人間の論理上の誤りも、人間の性格の欠点も、彼の主張したところによれば、その人が物を書くスタイルと文章の構造そのものに反映されている。積極的な意味でも消極的な意味でも、スタイルは人そのものである。それはまさしく、物を正しい光のもとに見る問題なのだ」<sup>10)</sup>。この言葉のエトスがカネッティにも妥当するとすれば、カネッティに独特の文体はじつは、『群衆と権力』の思考法そのものに他ならない。「カネッティの詩学はその核心において、言語に対する感覚の倫理学として姿を現わす。さらに言えばカネッティにおいて詩人とは、言語の不完全さの罪を自らに引き受け、それを「感受」できる者、いわば世俗化された救済者となる」<sup>11)</sup>、とも指摘される。

講演「詩人の使命」が行われた当時の時代状況に目を移そう。この講演の狙いを読み解く鍵は、実際当時「文学」が置かれていた時代状況に密接に関係している。カネッティは「明言はしていないものの、それでも60年代から70年代にかけてなされた文学論争の文脈を知る者には誤解しようのない形で、エンツェンスベルガーその他によって唱えられた、文学の死というテーゼに異議申し立てを行なっている」<sup>12)</sup>、とツュムナーは指摘する。カネッティは「詩人の使命」の冒頭、当時文学に宣せられていた死亡宣告について、たしかに次のように述べている。「すべての文学が死滅したなどという陳腐な意見が、宣言だなどと受けとめられ、もったいぶった言葉で、高価な紙に印刷されています。あたかも複雑で難解な思想的所産が問題となっているかのごとく、大真面目に、厳粛に議論がなされているのです」(VIII, 272)。辛辣さの点では、カネッティもベルンハルトに負けていない。カネッティの「詩人の使命」は、ベルンハルトの言う「年寄りの傲慢」などではなく、『群衆と権力』出版後もあまり公の場に出ることなく研究を続けたカネッティが珍しく、時代のアクチュアルな議論に対して見せた、公然たる反応である。カネッティが発したメッセージを的確に理解すべく、また従来ほとんど議論されることのなかった、戦後ドイツにおけるカネッティの位置取りを探る意味でも、「文学の死」をめぐる議論の経過を見ていく。

9) 拙論「武器としての笑い——カネッティにおける言葉の闘争」(『オーストリア文学』第22号、2006年、20～28頁)参照。

10) S・トゥールミン、A・ジャンク『ワイトゲンシュタインのウィーン』(藤村龍雄訳、平凡社、2001年)109頁。

11) Rüdiger Zymner, S. 579.

12) Ebd. S. 576.

1958年、西ドイツでは連合国による追求とは別に、ナチ犯罪調査のためのセンターがルートヴィヒスブルクに設立された。以後、ドイツ人自身の手によっても、強制収容所を始め、ユダヤ人に対する非道の数々が明らかにされていく。何でもない、ごく普通の一般市民が残虐行為に加担し、戦後は何事もなかったように暮らしている。数多くのそんな事例が連日裁判の傍聴記録や新聞報道、その他のメディアを通して伝えられ、いやがうえにも政治的センシビリティが強められる<sup>13)</sup>。61年8月には、東西ベルリンの境界線が遮断され、東側によるベルリンの壁構築も開始されている。

1960年、カネッティが「ファシズムの根源についての研究」<sup>14)</sup>と位置づけた、『群衆と権力』がようやく出版にいたる。終戦から十五年、すでに西ドイツでは戦後の復興も一段落し、社会批判的傾向が次第に顕在化し始める時期に当たる。カネッティにおける群衆と権力の関係はただし、巨大化した、恣意的権力の前に服従し、意のままに操られる群衆のそれとは、趣を異にする。『群衆と権力』の中に、「ファシズムの根源」としての群衆、および権力の問題について、カネッティが要約的に述べている箇所がある。

人間の権力と、人間が自分自身について抱いた想念は、人間が細菌にめぐり会ったときには、すでに巨大なものになっていた。人間は自分自身をますます重く受けとめ、自分を仲間の人間たちから隔絶した、個別化された個人として見るにいたっており、今や自身と細菌とのコントラストはほかに比べようもないほど大きかった。細菌はしかし害虫よりもはるかに小さく、もはや肉眼では捉えられず、さらに急激に増殖する。以前にも増して偉大で、孤立した人間に、以前にも増して巨大な微生物の群衆が対峙する。この想念の重要性はどれほど評価しても過大評価にはならない。この想念の形成は、人間の精神史における中心的な神話の一つである。それは権力のダイナミズムの本来的モデルであり、人間は自らに対峙する一切をすすんで害虫と見なす決意を固めた。人間は自分に役立たないすべての動物を害虫同様に感じ、害虫同様に扱った。人間を動物に格下げし、下等な種族に属するという、ただそれだけで人間を支配することに慣れた権力者はしかし、やがて彼にとって支配に値しないと思われるすべてを害虫にまで格下げし、最後に何百万という単位でそれを破滅させるにいたった。(IX, 430)

ここに言う「権力者」が、具体的にヒトラーそのものに他ならず、「害虫」がユダヤ人であることに疑いの余地はない。しかしカネッティの眼差しはやはり、はるかそれ以前を見据えており、その問いは群衆、権力の想念が形成された原初以来の人間とそれら想念との関係、人間の思惟、および表象の形式、また行動様式に向けられている。当然と言えば当

13) 三島憲一『戦後ドイツ——その知的歴史』(岩波書店、1991年)121頁以下ほか参照。

14) Elias Canetti: Gespräch mit Horst Bienek. In: Die gespaltene Zukunft. S. 93-103. S. 98.

然のことながら、一部の読者を除いて『群衆と権力』が広く受け入れられることはなかった。

同じ60年5月、折しもナチによるユダヤ人虐殺の責任者の一人アイヒマンが、潜伏先アルゼンチンでイスラエルの情報機関により捕らえられている。アイヒマンは二年後「人道に対する罪」その他を理由に絞首刑となるものの<sup>15)</sup>、61年エルサレムで始まった裁判の様子がテレビ中継され、報道を目にした視聴者の間に国境を越えた議論が沸き起こる。のちに一連の実験によって、閉鎖的環境下における人間の権威主義的傾向を検証したミルグラムは、たとえば『服従の心理』にこう記している。

自分が邪悪な行為の連鎖の途中の一環に過ぎず、行為の最終結果から遠く離れているときには、心理的に責任を無視しやすい。アイヒマンですら、強制収容所をひとめぐりしたときには吐き気を催したが、大量殺人に参加するためには、机の前に座り、書類をめくっているだけでよかったのだ。同じように、実際にサイクロンBをガス室に送った男は、上からの命令に従っただけであるとの理由で、自分の行動を正当化することができた。<sup>16)</sup>

『群衆と権力』が当時注目されることはなかったとはいえ、アイヒマン裁判はカネッティが『群衆と権力』に展開した「命令」の考察に、格好の例証を提供した。カネッティによれば、遂行される命令はすべて当の遂行者の内部に棘を残す。ただしこの棘は命令が与えられたとき命令自体がそうであったように、この者にとって馴染みのないものである。棘がどんなに長く内部に付着していようと、それは決して同化されず、いつまでも異物のままにとどまる。命令が遂行者にとってよそよそしいものであればあるほど、命令がこの者に行なわせることに対する、当事者の罪の意識はますます薄れてくる。「命令は、あれやこれやの悪事を働いたのがこの者自身でなかったことを証言してくれる、遂行者のための永続的な証人となる」(IX, 392)。それ故命令によって行動する人間たちがその後営む生活は、それとはまるで無縁の生活であり、その人間たちが遂行したことの片鱗すらとどめない。

2005年5月8日、六十回目の終戦記念日に当たるこの日、『ヴェルト』紙社説はやがて「文学の死」が叫ばれるにいたる60年代を、こう振り返った。

60年代、フランクフルト学派の影響のもと、西ドイツの知識人たちがドイツの罪の問題と対決し始めたとき、多くの者が連邦共和国の社会と国の現実に、ヒトラーの第三帝国からの連続性を見出した。今や西ドイツの政治的安定は「復古的」であるとし

15) 仲正昌樹『日本とドイツ——二つの戦後思想』(光文社、2005年)26頁以下ほか参照。

16) スタンレー・ミルグラム『服従の心理——アイヒマン実験』(岸田秀訳、河出書房新社、1980年)28頁。

て、まさに批判の矢面に立たされた。治安政策であれ、外国人政策であれ、家庭政策であれ、68年世代によって刻印を押された新たな時代精神にそぐわないものは、以後、褐色の過去もろとも信用を失墜させられるのがふさわしく思われた。<sup>17)</sup>

批判は、文学のエリート主義的あり方にも向けられる。

戦後、とりわけ西ドイツにあっては、文学者の公共の場での積極的発言が是とされ、文学には社会に対する異議申し立て、政治に対する告発者の役割も期待された。「プラハの春」崩壊後の68年11月、エンツェンスベルガーはしかし、当時もはや「われわれの状況では、文学作品の本質的な社会的機能など提示し得ない」<sup>18)</sup>として、いわゆる「文学の死」を宣言するにいたる。彼らの時代診断に従えば、「今日あらゆる文学および芸術作品の政治的無害はあまりにも明らかであり」<sup>19)</sup>、文学はむしろ体制補完的役割を果たしているに過ぎない。社会の中で学生運動がどんな役割を果たすべきか、あちこちで連日激しい議論が繰り広げられるなか、エンツェンスベルガーはルポルタージュ文学の必要性、書き手と読み手のフィードバックの必要性を訴える<sup>20)</sup>。ヘルダーリンの詩「追想」の最終行、「だが詩人たちは留まるものをうち建てて (Was bleibet aber stiften die Dichter)」は、従来「詩人の使命を肯定的に歌った」ものと解釈され、おおむね「芸術の優越を賛美する」詩行として理解されてきた<sup>21)</sup>。エンツェンスベルガーはこの詩行もまた、「あとに残るものをつくるのはテレビ番組である (Was bleibet, stiftet das Fernsehen)」<sup>22)</sup>として、パロディー化してみせる。これに端を発するその後の議論の一連の経過が、カネッティの耳にはあまりにも「陳腐な意見」としてではあるものの、確実に届いていた。カネッティは「作家 (Schriftsteller) の使命」でも、「思想家 (Denker) の使命」でもなく、まさに「詩人 (Dichter) の使命」と題して講演を行なうことで、上に引いたエンツェンスベルガーの発言に、正確に照準を合わせている。

カネッティが「詩人の使命」と題して行なった講演の背景には、たしかに文学が死を宣告されていた当時の時代状況がある。この講演が行われた1976年以降も、カネッティによる「文学の死」に対する異議申し立ては続けられる。77年以降、生家ブルガリアのルスチュクに始まり、1937年のウィーンで結ばれる自伝三部作、『救われた舌』(1977年)、『耳の中の炬火』(1980年)、『眼の戯れ』(1985年)が続々と出版される。カネッティの自伝

17) Ralf Georg Reuth: Die Erinnerung muß den Weg in die Zukunft weisen. Leitartikel. In: Die Welt vom 8. 5. 2005.

18) Hans Magnus Enzensberger: Gemeinplätze, die Neueste Literatur betreffend. In: Kursbuch 15 (1968). S. 187-197. S. 195.

19) Ebd. S. 194.

20) 早崎守俊『グルッペ四十七史——ドイツ戦後文学史にかえて』(同学社, 1989年), とりわけ172頁以下参照。

21) 矢羽々崇『詩人の個人性と社会性——ヘルダーリンの詩「追想」』(近代文芸社, 1997年) 85頁。

22) Hans Magnus Enzensberger, S. 187.

が亡命前のウィーン時代にとどめられた理由の一つも、おそらくはこの文脈で理解される。文学など何の役にも立たないとされる時代にあつてそれを公然と擁護し、自伝その他の著作を通して、カネッティは大戦によって中断された中欧、とりわけウィーンにおける文化的営為を、現代によみがえらせている。カネッティの文学活動は、研究、思索、執筆、朗読と、その後も最晩年まで精力的に続けられた。これらの活動を支える根拠になつたと思われるのが、本稿が扱う「変身」の思想である。

## 2. ミメーシスの問題圏

変身のプロセスは、たしかにカネッティにとっては「神秘的な、その本性という点でまだほとんど解明されていないプロセス」(VIII, 279)である。ただし人間についてのこのような捉え方が、カネッティによる独創というわけでは決してない。カネッティ自身、「詩人の使命」の中で述べている。「人々はこのプロセスを様々に名づけようと試みてきました。たとえば *Einfühlung*, あるいは *Empathie* という語が用いられました。今それを申し上げることはできませんが、私は訳あつてより要求の多い言葉、*Verwandlung* を用いることにしました」(VIII, 279)。ドイツ語の *Einfühlung*, *Empathie* は、日本語ではともに「感情移入」と訳す。ドイツ語の文脈でも、後者は *Einfühlung* を意味する英語の *empathy* からの借用語に過ぎず、意味的差はほとんど見られない。カネッティはここで「変身」を、ひとまずこれらの語に比して、「より要求の多い言葉」と規定している。変身の境界域にある術語や概念をめぐる議論としては、ほかに『群衆と権力』の次の箇所なども挙げられる。「模倣」と「変身」はほとんど区別されることなく、あいまいなまま同じプロセスを指す言葉として用いられているものの、両者ははっきり区別するのが望ましい。この二つは決して同一のことを意味してはいないし、両者を注意深く使い分けることは、変身自体の本来的プロセスを明らかにする手助けにもなる」(IX, 437)。「模倣」の原語は、通例ミメーシスのドイツ語訳として用いられる、*Nachahmung* である。カネッティが変身と呼ぶ当のプロセスは、古代ギリシア以来「ミメーシス (*Mimesis*)」と称されてきた、人間の模倣能力、およびそのプロセス周辺を言い当てようとしているのがわかる。

後述するカネッティの変身の議論と同様、西欧においてはそもその始まりから、ミメーシスの議論はアンビヴァレントな形で、文学および芸術をめぐる議論に付随している。『国家』最終巻の冒頭、プラトンは次のように述べている。「われわれのこの国については、ほかの多くの点でもこの上なく正しい仕方でも国を建設してきたと思うけれども、とりわけ詩(創作)についての処置を念頭に置いてそう言いたい。詩(創作)の中で真似ることを機能とするかぎりのものは、けっしてこれを受け入れないということだ」<sup>23)</sup>。ここでプラトンは、彼の理想とする国家から、ミメーシス、および詩人に対する排除宣告を行なう。

23) プラトン『国家(下)』(藤沢令夫訳、岩波書店、1979年)302頁。



もちろんプラトンが、「芸術に対する無理解と、偏狭な道徳心から詩を排除しようとした、というような批評は無視してよい」<sup>24)</sup>。だとしても、やはりなぜプラトンはミメーシス、詩人に対して、敢えて排除宣告をする必要があったのだろうか。

ゲバウアーとヴルフによれば、プラトンにおけるミメーシスの議論は、「口承文化から文字文化への移行」<sup>25)</sup>の問題を背景としている。文字が誕生する以前、人間はおもに身振りや踊り、また音声言語を通して、人間や事物を模倣し、表現していたと考えられる。文字の出現により、それまで音響によっていたコミュニケーションが文字として書き下ろされ、可視的な対象に変化する。ひとたび文字化の過程を経て固定されると、後から読まれ得る、引用可能、検証可能なものとなって、独自の生の営みを始めるにいたる<sup>26)</sup>。他方口承詩人たちによる物語は、身振りや手振りをまじえながら、場に居合わせる者たちの心を動かし、彼らを出来事の世界に関与させる。語り手による身体表現と情緒的模倣の二面的ミメーシスが引き起こす作用は、しばしばある種の感染と表現されるほどに直接的、身体的であり、それによって物語の世界への同化のプロセスが、瞬く間に聴衆の内面にも生起する。プラトンが最初に挙げる、ミメーシスに対する懐疑的態度の本質的理由もここにあり<sup>27)</sup>、結局プラトンは、「一方においてミメーシスの重要性を認識しつつ、他方その予測し難い力を恐れている」<sup>28)</sup>、とゲバウアーとヴルフは指摘する。いずれにせよ西欧においては、ミメーシスをめぐるあらゆる議論の出発点がここにあり、カネッティの変身の議論にも、重要なインパクトを与えたと考えてはば間違いない。

カネッティにおける変身の含意を明らかにすべく、ここではハーバーマス後のフランクフルト学派を代表する一人アクセル・ホネットの論考も参考にしつつ、ホルクハイマー、アドルノによる『啓蒙の弁証法』のミメーシスの問題を見ておく。ホネットは「自然状態の終わりのない永続」と題した論考の中で、『群衆と権力』と『啓蒙の弁証法』に幾つかの重要な思想的連関を指摘している。両者の間のとりわけ重要な思想的親和性は、ほかでもない群衆と権力の問題に関係している。ホネットによれば、両者にはまず、「現代の全体主義における権力の自己増殖の源泉は、人間が自己を確立した太古の原始にすでに獲得していたと思われる論理性にある」<sup>29)</sup>、という共通の認識がある。カネッティの『群衆と権力』では、権力と並んで群衆が議論のもう一方の軸として構想されている。他者への通路に他ならない変身は、その群衆の考察において最重要の位置を占めると考えられ、人間

24) 小池澄夫「ミメーシス」(現代哲学の冒険6『コピー』(岩波書店、1990年)207～263頁所収)259頁。

25) Gunter Gebauer und Christoph Wulf: Mimesis. Kultur – Kunst – Gesellschaft. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt Taschenbuch Verlag) 1992. S. 15.

26) Vgl. Ebd. S. 75.

27) Vgl. Ebd. S. 72.

28) Ebd. S. 15.

29) Axel Honneth: Die unendliche Perpetuierung des Naturzustandes. Zum theoretischen Erkenntnisgehalt von Canettis „Masse und Macht“. In: Michael Krüger (Hg.): Einladung zur Verwandlung. Essays zu Elias Canettis „Masse und Macht“. München und Wien (Carl Hanser Verlag) 1995. S. 105-127. S. 105f.

を個と合理性の呪縛から解き放つ、基本原理の役割を果たす。ホネットはこの変身についても、次のように見ている。

カネッティの構想におけるこの概念は、ホルクハイマー、アドルノによる『啓蒙の弁証法』の「ミメーシス」の概念が占める、相矛盾した役割に正確に対応している。変身は系統学的には、人間が周囲の環境との格闘の中で、周囲の動植物に突如として姿を変え、自己を維持、確立していく太古の衝撃にさかのぼり、しかし歴史的時間の流れの中で、ついには美的自由という形でかろうじて残存するにいたった、人間の行動様式を表す。それ故ミメーシス同様に変身もまた、行動理論的に戦略的計略と造形的遊戯の間の、まさに真ん中に位置する。人間の変身能力の後者の側面、つまり造形的遊戯の側面に最大限の活路を見出すこと、それが、カネッティがその輪郭を思い描く、彼の解放された社会の核心に他ならない。<sup>30)</sup>

人類史の初期段階にあって、人間は自然の強制力、脅威を逃れ、自己を保存するため自然を模倣し、理性の力を借りて主体を確立していく。ホルクハイマーとアドルノによれば、人類史、すなわち啓蒙の目的は、「人間たちから恐怖を取り去り、人間たちを支配者の地位につけること」<sup>31)</sup>にあった。なるほどかつて自然が人間に及ぼした強制力は、文明化の過程において、「労働」<sup>32)</sup>の形で受け継がれている。とはいえ『啓蒙の弁証法』の著者たちは、それによって「社会における自由が啓蒙的思想と不可分のものであることを、いささかも疑うものではない」<sup>33)</sup>。著者たちの目的はあくまでも啓蒙の自己省察にあり、ここでは人類の主体性、個の確立の原史における、他でもない「ミメーシスと合理性の関係」<sup>34)</sup>が検証される。

まったき自然状態の中にあつて、人間は自らが生き残るため、また人間が人間自身となるため、理性によりミメーシスを制御し、自然状態から抜け出していく。周囲の事物や人間に対して、ミメーシス的な関係が強い段階にあっては、人間は依然として直接的に、もしくは間接的に自然に影響を及ぼすことが可能だった。「呪術師はデーモンたちと似たふるまいをし、デーモンを驚愕させたり宥めたりするために、恐ろしげに、あるいは優しげに振る舞う」。「娘の身代わりには雌鹿が、最初に生まれた男の子の身代わりには子羊がささげられ」、「敵の槍や髪や名前に何か起きると、同時にその人物の身にも何か起きる」<sup>35)</sup>

30) Ebd. S. 123f.

31) Max Horkheimer und Theodor W. Adorno: Dialektik der Aufklärung. Philosophische Fragmente. In: Theodor W. Adorno: Gesammelte Schriften, Band 3. 2. Auflage. Frankfurt am Main (Suhrkamp Verlag) 1984. S. 19.

32) Ebd. S. 52.

33) Ebd. S. 13.

34) 三光長治「ミメーシス——アドルノのキイ概念をめぐって」(徳永恂編『フランクフルト学派再考』(弘文堂、1989年) 163～185頁所収) 168頁。

35) Max Horkheimer und Theodor W. Adorno, S. 26.

とされた。ホルクハイマーとアドルノによれば、「呪術は科学と同様に目的を志向するもの、その目的の追求はミメーシスを介してであり、客体との距離を拡大することによってではない」<sup>36)</sup>。

だが、人間が自然の諸力に影響を及ぼすとき効力を発揮するミメーシスとは別の原理、計算や考量、「比量の論理」<sup>37)</sup>こそ、人間が自然に対して自らを主張し、やがてその存在を確固たるものにしていく合理性の諸形式に他ならない。合理性は神話的諸力の地位に上り詰め、自己保存の手段になり変わる。外的、内的自然との非合理的交流が敵視され、啓蒙はかつて自らが批判を加えたはずの、出来事を反復として説明する神話と同じ、「内在の原理」<sup>38)</sup>を身にまとう。「啓蒙は通分不可能なものを切り捨てる」。<sup>39)</sup>「神話が生命なきものを生命あるものと同一視したのと同様に、啓蒙は生命あるものを生命なきものと同一視する」。<sup>40)</sup>たしかに合理性は世界に対する人間の態度に安定をもたらす。しかし他方においてそれは、外的、内的自然が包含するさまざまな可能性を、人間から奪い去りもする。<sup>41)</sup>ホルクハイマーとアドルノによれば、ミメーシスは十分に飼い馴らされ、芸術においてかろうじて生きながらえている。

### 3. 「変身」の詩学

前節に見ておいたように、カネッティは変身という用語で、基本的に古代ギリシア以来ミメーシスと称されてきた人間の模倣能力、およびそのプロセス周辺を言い当てようとしている。西欧におけるミメーシスをめぐる議論には、そもそもプラトンに始まる長い議論の歴史があり、ホルクハイマー、アドルノによる『啓蒙の弁証法』を始め、依然両価的議論として今日にいたっている。カネッティは当然これらの議論を踏まえていると思われるのだが、現在公刊されている著作の中で、カネッティがミメーシスの議論に言及している箇所は見当たらない。カネッティの当の変身は、これらの議論をどう引き受け、さらにどのように展開させているのだろうか。

カネッティの変身においては、とりわけ有史以前の、長い時間の経過に注意が喚起させられる。シッケルとのインタビューの中で、カネッティはたとえばこう述べている。「私は人間の起源をはるか遠く、先史時代よりさらにずっと以前の時代に、我々がどんなものをもってしてもまったく証明できず、あるいは場合によってただ断片的にのみ証明し得るような時代に想定しています。人間は優れて変身する存在であり、自らの環境を形成して

36) Ebd. S. 27.

37) Ebd. S. 26.

38) Ebd. S. 28.

39) Ebd. S. 29.

40) Ebd. S. 32.

41) Vgl. auch Gunter Gebauer und Christoph Wulf, S. 392ff.

いた動物たちへの変身によって、人間となったのです」<sup>42)</sup>。人間が他の動物たちから明確に区別されて暮らすようになるまでには、どれほどの時間が経過していただろうか。たしかにすべては推測の域を出ない。文字などの形で記録として残された歴史はわずか数千年に過ぎず、それ以前には動物と人間とが明確に区別されない、今日我々が知ることもない長い時間が経過していたと思われる。やがて人間は動物たちの世界から切り離され、個が確立され、近代以降には自由かつ平等な、尊厳ある個人によって構成される市民社会が自覚的に目指された。とはいえ、やはりカネッティの変身を読み解く際に、個が確立される以前の、長い時間の経過を確認しておく必要がある。1942年の『断想』に、カネッティは次のように記している。

猿たちが他の動物たちより人間に近いというのは、今日ではもはや真実ではない。我々と動物たちとの間には、おそらく長い間どんな区別もなかったのだろう。その頃動物たちは私たちに非常に似通っていたはずである。無数の変身の結果、今日私たちは動物たちから遠く隔てられ、猿からも鳥からもほとんど同程度に、その幾ばくかを受け継ぐにいたっている。(XII, 24)

カネッティの思念は、数千年の時空をあっさりと行き来する。現在の人間の思考形式、行動様式の中には、個が確立される以前に起源を有するものが混在し、我々は何の疑念もなくひょっとするとそれに盲従してはいないか。カネッティにおいてはつねに、人間の思考と行動が根底から問いただされる。1943年の『断想』にも、カネッティはこう記している。「人間は単一体ではなく、自らが暴行を加えたあらゆるものを体内に保持している。あらゆる人間たちがそうしたものを程度の差こそあれ含み持っていて、その結果彼らは互いにひどい仕打ちを加え合うことができる」(XII, 66)。カネッティによれば、確固とした個が確立されたと思われる時代にあっても、人間は個であると同時に、群れや群衆として、自らすすんで個を踏み越えようとする。そこに働くダイナミズムは何なのか。なぜ人は個と非個を往復するのか。カネッティにとって変身は、きわめて真剣に受けとめられた、現実的な問題であり、人間の想念や思考がたどってきた形式とその可能性、人間がたどってきた行動様式、生のあり方とその可能性が連続的に議論される、その根幹に関わっている。『群衆と権力』中、「模倣」と「変身」の違いについてカネッティが触れている箇所を拾いながら、以下に変身の説明を試みてみる。

模倣 (Nachahmung oder Imitation) は一言で言えば、変身のための第一歩、ただちにまた中断される最初の動作以外の何ものでもない。そのような動作は矢継ぎ早に行われ得るし、様々な対象について次々可能となる。猿たちを見ると、これはとりわけよ

42) Elias Canetti: Gespräch mit Joachim Schickel, S. 125.

く観察される。彼らの模倣の軽率さこそ、変身のプロセスを深化させる妨げとなる。模倣の二次元的との対比で言えば、変身は何か一個の身体のようなものである。(IX, 438)

模倣は変身へといたる最初の動作であり、したがって変身の一部を成している。模倣は変身へと深化し、模倣が平面的な何かであるのに対して、変身は少なくとも立体的に捉えられた、一定の形状と体積を有した固体としてイメージされる。

模倣は外面的事柄に関わる。模倣は人々の目の前にある何かを前提とし、その動きが写しとられる。音について言えば、模倣はもはや同一の音の再生以上のことを意味することはなく、模倣する者の内面の状況については何も表現しない。猿や鸚鵡はたしかに模倣するものの、模倣の過程において自分自身が変化しているとは考えられない。彼らは自分たちが模倣しているのが何かわかっておらず、このプロセスが内面から体験されることが決してない。猿や鸚鵡には、ある事から他の事へ次々飛び移ることが可能だが、彼らにとってその順番など何の意味も持たない。猿や鸚鵡の持続性の欠如が、模倣を容易にしている。(IX, 437f.)

この引用との関連で変身の説明を試みるとすれば、変身は外面ばかりでなく、内面にも関わる。変身の過程においては、むしろ模倣する者の内面の状態が肝心であり、内的変化をとまなう。変身する当人は、当然自ら変身するものが何であるかを熟知し、模倣を内面から体験する。したがって猿や鸚鵡の模倣のように、変身は不用意に次々と連続しては行われず、一定の時間的持続を必要とする。

ある人物は、自らが頻繁に用いる特定の決まり文句によってそれと見分けられるかもしれない。それらの決まり文句を模倣する鸚鵡は、当の人物のことを外面的に思い出させるかもしれない。だがこれらの文句は、その人に固有の特徴を表すものである必要などまったくない。それらはその人物がその鸚鵡にしか使わない台詞かもしれない。この場合、鸚鵡はまるでどうでもいいことを模倣していることになる。もともとの人物を特定しようとしてみたところで、あらかじめそうと知らされないがぎり、誰にも特定などできない。(IX, 438)

変身のプロセスにおける模倣では、変身する本人が、熟知する対象への模倣を内面から体験する。さらにその模倣は、模倣される対象に「固有の特徴」を捉えるという点に力点が置かれる。同じ「変身」の章の中で、これは変身のプロセスにおける「結節点」(IX, 402)とも呼ばれている。

『群衆と権力』中、カネッティが「模倣」と「変身」の相違について言及している箇所は、残念ながら以上である。五百頁を優に越える同書の中で、ほかに助けとなる説明がされる

ことはなく、とはいえ例証に挙げられる世界中の神話や民話、伝承、記録が、これに矛盾することもまたない。「変身」の記述に充てられた一章では、ブリークが記したブッシュマン・フォークロアについての一冊の書物に始まり、順にオーストラリアのロリテャ族の神話、グルジアの物語、ホメロスの『オデュッセイア』にシャーマンたちの発作、中部オーストラリアの北部アラング族の間で採取された神話に続き、アルコール中毒者たちの幻覚、コカイン譫妄、インドの物語、エジプトの神々にキリスト教の悪魔や魔女、カースト制度、さらに北アメリカのインディアン神話と続く。<sup>43)</sup> カネッティの記述はあくまでも個別的、具象的なままに続けられ、性急な結論が導き出されることは最後までない。

幾分長くなるが、カネッティが「変身の分かりやすい具体例」と呼ぶものを、1943年の『断想』から引いておく。

今日食事に出かけたとき、私の右手に配達に使われる類いの車が一台近づいてきた。運転していたのは女性で、頭から下はほとんど見えなかった。いつもストーブの灯油がそんな車で我が家に届けられていた。あばた顔のひどく醜い娘が車を運転し、タンクに灯油を入れていく。日頃からこの娘の運命には興味を引かれていたのだが、彼女についてはほとんど知るところがなかった。今通り過ぎたのが彼女かどうか、私は自問してみた。そして精一杯凝視してみた。何とも決めかねたが、しかし彼女の眼差しがたしかに自分に向けられているのを感じた。彼女が通り過ぎて一、二秒も過ぎただろうか。やっぱり彼女ではなかったのではないか、私は自問した。それからおもむろに左手を見ると、急に自分が家並みを猛烈な速さで通り過ぎている感覚を覚えた。これらの家並みはまさに私の隣りをすべるようにかけ抜け、まるで自分が車に乗っているかのように感じた。この感覚があまりに強烈で、避けようにも避けようがなかったので、私はこれについて考え込んでしまった。ここに私が言う変身の分かりやすい具体例があることに、疑いの余地はない。私の視線と彼女が返した眼差しが、私を運転席の娘に変身させた。今度は私が彼女の車で道を走って行ったのだった。(XII, 57f.)

カネッティに従えば、カネッティはここで模倣を、いわば内面から体験している。カネッティの視線が結節点となる女性の眼差しに送られ、カネッティが運転席の娘に変身している。説明にももちろん矛盾はない。カネッティの説明はただし、ここでもやはり個別的、具象的なままにとどめられ、カネッティの書物を手にする読者は、性急な一般化や抽象化を志向しない、『群衆と権力』の思考法に従い、事例に挙げられる変身の一つずつ追体験していく。

43) これら個別の事例の検討については、別に稿を改めたい。

#### 4. 他在の可能性

ホネットの示唆するところによれば、カネッティの変身はホルクハイマー、アドルノにおけるミメーシス同様、行動理論的に戦略的計略と造形的遊戯の真ん中に位置した。また、カネッティがその輪郭を思い描く解放された社会の核心は、人間が持つ変身の能力の造形的遊戯の側面に最大限活路を見出すことにあった。それにしても、カネッティが古来ミメーシスと呼び習わされてきた人間の模倣能力を、敢えて変身と呼び改め、決してミメーシスという用語に触れない理由は何であろうか。

プラトンにおけるミメーシス同様、カネッティの変身もまた、他者への通路であるがゆえの両面的側面を合わせ持つ。人間は変身の能力によって、たしかに他者への憐憫の情を抱くことができる。ただし、その同じ変身の能力がゆえに個が解消され、群衆となる局面は、視点を変えると人類の未分化な自然状態への回帰をも意味している。カネッティはにもかかわらず、プラトンがミメーシスの予測し難い力を恐れたのとは対照的に、人間の変身の能力にむしろ希望を託す。講演「詩人の使命」に先立つシッケルとのインタビューの中で、カネッティは述べている。

人間は一人一人非常に多くの素質を有していて、これらの多くは結局過去のおびただしい変身に由来しています。もともと人間は単一体などではありませんし、単一体として生きるべく求められてもいませんでした。すでにギリシア人たちの間に見られるものの考え方、たとえばプラトンの『国家』がそうですが、人間たちがただ決まったものだけを作り、ずっとそれを作り続けるという考え方を、私は最大の錯誤の一つだと考えています。それは人間の本性に反していますし、人間の本性は、それぞれが持つ天分に応じて、多彩な活動を必要とすると確信しています。<sup>44)</sup>

カネッティにとって一人一人の人間は、人間たち自身が通常そう考えるようには、決して独立した精神活動を営んではいない。人間の内部には、過去から現在へと連なる、また現在における様々な関係性が内包され、そもそも個人という考え方すら、大いに疑問視される。カネッティの目にはそれ故どんな生存の形式も、動かす難い、絶対的なものとは映っておらず、それぞれの人間がそれぞれの内側に、現在とは異なる存在の可能性を有している。

カネッティは「詩人の使命」で、他者の経験に対する内面からの欲求は、我々の通常の公の生活を成り立たせているような、いかなる目的によっても規定されてはならず、成功や価値といったものへの意図から完全に自由でなければならない、それは情熱そのもの、

44) Elias Canetti: Gespräch mit Joachim Schickel, S. 126.

まさに変身の情熱でなければならないとも述べていた。カネッティが『群衆と権力』に記すもう一つの区別が、この変身の含意を明らかにする。

模倣が表面的、瞬間的なものにとどまるのに対して、カネッティにおける変身は内的変化をとめない、時間的持続を必要とした。変身する者は変身する対象に固有な特徴、結節点を媒介として対象に変身する。この変身はさらに、いかなる目的や意図からも完全に自由であることが求められる。『群衆と権力』中、模倣と変身の間に意識的に踏みとどまる過渡的形態、「擬装 (Verstellung)」(IX, 438) が、次のように区別されている。

のちのあらゆる権力の形態に受け継がれることになる、敵意を隠し、友として誰かに接近するやり方は、原初的な、しかし重要な変身の一種である。それは表面的な変身であり、毛皮や角、声、足取りといった、外面的現象にのみ関係する。その下には触れられることのない、触れられることなどあり得ない、何ものにも影響されない殺意の狩人が身を潜める。内面と外面の、それ以上考えられないほど異なるこの分離は、仮面という形態においてその極致に達する。狩人は自身と自らの武器をしっかりと手中におさめ、しかし彼が身にまとう動物の形姿もまた、自在に操る。彼はどんな瞬間にもこの両者を制御する。彼はいわば同時に二つの生きものを生き、最後に目的を達するまで両者であり続ける。彼に可能な変身の流れは静止したままにとどまり、彼は明確に境界を区切られた二つの場所、一方が他方の中にあり、内部が外部から隔絶された二つの場所に位置する。(IX, 438f.)

ここからも読み取れるように、カネッティにとっては古来権力者の権力の源泉もまた、人間が持つ変身の能力に由来する。表面のみに関わるものとして区別される模倣も、この擬装もまた、カネッティにとっては人間が有してきた変身の遺産の一部である。カネッティはここで、明確な目的を内に秘めた狩人の擬装を糾弾しているわけではない。人間が生を維持しようとするかぎり、自己を保存する行為もまた、もちろん正当化されねばならない。とはいえ、カネッティの狙いはやはり、おそらくは合理性に回収されることのない、いかなる目的や意図からも自由な、変身における良質の部分を最大限救出することにある。「変身の番人」を自任するカネッティは、『群衆と権力』において、わずかな説明ながらそのための選別作業を慎重に行なっている。

カネッティの思考にはまた、たしかに未来の解放された社会に対するイメージがある。「詩人の使命」の文脈で言えば、文学行為は変身に関する文学、資料と取り組み、他方、読者にとっての変身の資料となることができるという意味において、未来の「実存の地図」<sup>45)</sup>を描く。個人や社会の在りようを左右する手掛かりを探すカネッティの目線の先にはただし、未来というよりも、むしろ今は知られていない人類の過去、歴史から排除され、

45) ミラン・クンデラ『小説の精神』(金井裕、浅野敏夫訳、法政大学出版局、1990年) 49頁。



削ぎ落とされたものが見据えられている。人間が知り得る自らの過去の営みは、文献や記録、文字などによって知られるわずかなものに過ぎず、メディアを通して世界中がくまなく均一化されていく中にあっても、地上には不可知の過去、神話、民話、伝承、今なお埋もれたままの人類の足跡が残っている。「詩人の使命」でカネッティは、この未知なるものとの出会い、またそれへの期待について、ギルガメッシュ叙事詩を例にこう述べる。「十七歳で私はギルガメッシュ叙事詩に出会いました。それ以来それは私をとらえて離さず、まるで聖書にそうするかのように、繰り返しそこに立ち帰ったものでした。この叙事詩は私を、我々にとってまだ未知なるものに対する期待で満たしてくれました」(VIII, 277)。

西欧におけるオデュッセイア同様、ギルガメッシュ叙事詩もまた、広く西南アジア一帯において口承によって伝えられ、やがて文字として記録、保存された。しかし中断があったにせよ、西欧においてオデュッセイアが脈々と受け継がれてきたのとは異なり、ギルガメッシュ叙事詩が広く知られるようになったのは、ようやく二十世紀に入ってからである。考古学的再構成作業を経て、1900年初めてドイツ語に翻訳され、一般に手の届くものとなった。

カネッティにとって人間が知る歴史や目の前の現実、巨大な岩礁のわずかに水面から顔をのぞかせた、岩肌の域に過ぎない。人間は変身の力を借り、自らの環境の中で自己を主張する力、やがて巨大な権力を手に入れた。自己を主張する力と権力とは、人間につねに独立した個人であることを求め、他方人間はその意に反して、同じ変身の能力ゆえに個を踏み越え、群衆ともなる。「変身」の思想は、群衆と権力の問題を中心に生涯にわたって展開された、カネッティ思想の大動脈であり、カネッティの眼差しは静かに、我々が知るそれとは異なる生存の形式、他在の可能性を見据えている。

---

## Die Möglichkeit des Andersseins.

### Die Idee der ‚Verwandlung‘ bei Elias Canetti

SHISHIDO Setsutaro

Im Jahre 1976 hielt Elias Canetti anlässlich der Verleihung der Ehrendoktorwürde der Universität München eine Rede unter dem Titel ‚Der Beruf des Dichters‘. Diese Rede provozierte wütend ablehnende Reaktionen. Auch Thomas Bernhard, ein Vertreter der österreichischen Nachkriegsliteratur, meldete sich zu Wort. Bernhard meint, dass sich Canetti zum einzigen Dichter ausruft, Senilität rührend ist und die Arroganz eines Greises, der in dummen Sätzen auch seinen Kopf gestützt hat, peinlich ist. Die vorliegende Studie versucht, die Idee der ‚Verwandlung‘, die in Canettis Denken eine zentrale Rolle spielt, in Hinblick auf ‚Mimesis‘ - Debatten seit Platon

aufzuklären.

In ‚Der Beruf des Dichters‘ betont Canetti, dass der Dichter vor allem der Hüter der Verwandlung ist, Hüter in zwiefachem Sinn. Einerseits werde sich der Dichter das literarische Erbe der Menschheit zu eigen machen, das an Verwandlungen reich sei. Und in einer Welt, die die Verwandlung mehr und mehr verbietet, scheint es andererseits von kardinaler Bedeutung, dass es Dichter gibt, die diese Gabe der Verwandlung ihr zum Trotz weiter üben. Dies hat natürlich mit der Arroganz eines Greises nichts zu tun. In der Rede wendet sich Canetti gegen die von Enzensberger und Anderen vertretenen Thesen vom Tod der Literatur.

Canetti versucht, mit dem Wort ‚Verwandlung‘ das menschliche Nachahmungsvermögen und Ähnliches auszudrücken, das seit der griechischen Antike grundsätzlich als ‚Mimesis‘ bezeichnet worden ist. Nach Canetti ist es die Verwandlung, durch die sich der Mensch erschaffen hat. Durch sie hat er sich die Welt zu eigen gemacht, durch sie hat er Anteil an ihr. Dass er der Verwandlung seine Macht verdankt, vermögen wir wohl einzusehen, er verdankt ihr aber Besseres, er verdankt ihr sein Erbarmen.

Für Canetti gibt es keine größere Illusion als die Meinung, Sprache sei ein Mittel der Kommunikation zwischen Menschen. Für Canetti ist die Verwandlung ‚der einzige wahre Zugang zum anderen Menschen‘. Die Idee der ‚Verwandlung‘ bezeichnet eine Weise des menschlichen Verhaltens, die phylogenetisch auf den archaischen Impuls zurückgeht, sich durch plötzliche ‚Anverwandlung‘ an die Umwelt im Kampf zu behaupten. Die Verwandlung steht, wie die Mimesis in der ‚Dialektik der Aufklärung‘ von Horkheimer und Adorno, handlungstheoretisch zwischen strategischer List und gestalterischem Spiel. Dieser zweiten besseren Seite der menschlichen Verwandlungsfähigkeit größtmöglichen Raum zu geben, stellt den Kern der Vorstellung dar, in der Canetti sein Bild einer von jedem Zweck, jeder Absicht, im Grunde genommen, von jeder bloßen Rationalität befreiten Gesellschaft umreißt. Der Blick von Canetti richtet sich stur auf die Möglichkeit des Andersseins, das von den uns bekannten Lebensformen verschieden ist.